古代史研究と『万葉集』－奈良県関係者の研究史ノート－

舘野　和己

はじめに

『万葉集』は古代の歌4500首余を収録しており、作者も天皇・貴族から一般農民・防人までと幅広い。また歌の舞台も大和のみならず東国や大宰府にまで及んでいる。したがって万葉歌は、古代の歴史を復元していく上で、六国史などと並ぶ貴重なものであり、またそうした史書からは窺い得ない古代人の心情や生活、地方の実情などを知る手がかりとなっている。

そのため古代史学の中で、それは大いに活用されているところである。本稿は『万葉集』そのものというより、そこに収められた歌が古代史学の中で、近世以来どのように研究され、あるいは史料として用いられたのかということを紹介していこうとするものである。ただし歴史研究の性格上、自ずから考古学や地理学などの関係分野にも目を配る必要が出てくる。しかし研究者は数多く、総覧することは筆者の手に余るところである。そこで奈良県関係者－奈良で生まれた人や、奈良で活動を展開していた人など－で、既に鬼籍に入られた人のみを取り上げることにする。それも筆者の目に入った人とその著作のみを扱うので、本稿は決して体系的なものではない。いわば今後の作業のための整理ノートにすぎないことを、初めにお断りしておきたい。

1　近世における研究

(1)　本居宣長

まずは近世における研究を振り返るが、古代史との関わりをもった研究という点では、『万葉集』の利用は、主にそこに見える地名を古代史と結びつけるという形で現れる。それは具体的には地名考証という作業となるが、そうした研究は近世以来かなりの蓄積がなされていると言えよう。

その方面では奈良県関係者ではないが、やはりまず本居宣長（1730－1801）の『菅笠日記』を紹介せねばならないであろう。国学者である宣長は、5人の同行者とともに明和9年（1772）3月5日に伊勢松坂を発ち、吉野へ向かった。それは冒頭部に「よき人のよく見て。よしといひおきける。吉野の花見にと思ひたつ」（333頁）[1] とあるごとく、古典研究を通じてなじみの深かった大和の吉野に花見に行こうとする旅であった。吉野の花見は20年来の希望であったが、毎年春に支障があって実現しなかったのを、この年ようやく宿願を果たしたのである。上に引いた部分の後に、「萬葉一に　よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」と割書で注記したように、この表現は『万葉集』巻1-27の天武天皇が吉野宮に行幸した時の歌を踏まえたものであり、冒頭部から早くも宣長の古典への知識が湧出しているのである。

宣長は出発後、榛原・初瀬・多武峰・吉野・壷阪・檜隈・岡・飛鳥・藤原宮跡・三瀬・久米寺・畝傍山・三輪山などを回り、3月14日には松坂に戻っている。10日間の旅であり、その間の紀行文が『菅笠日記』であるが、行く先々の記事の中に『万葉集』や『古今集』、それに『日本書紀』『文徳実録』『延喜式』など、さまざまな文献を引いており、中には考証を加えている箇所もある。

たとえば「西たうげ角柄などいふ山里共を過て。吉隠（ヨナバリ）にいたる。こゝはふるき書どもにも見えたる所にしあれば。心とゞめて見つゝゆく。猪養の岡。又御陵などの事。（萬葉歌に吉隠の

ゐかひの岡式に吉隠陵。光仁天皇の御母也）かごかけるをのこにとへど。しらず。里人にたづぬるにも。すべてしらぬこそ。くちをしけれ。又この吉隠を。萬葉集に。ふなばりといふよみをしもつけたるこそ。いとこゝろえね。もじもさはよみがたく。又今の里人も。たゞよなばりといふなる物をや。そも旅路のにき（＝日記）に。かゝるさかしらは。うるさきやうなれど。筆のついでに。いさゝかかきつけつる也」(338頁）という一節からは、宣長の考証的態度を知ることができる。彼は万葉歌「降る雪は　あはにな降りそ　吉隠の　猪養の岡の　寒からまくに」(巻2-203)に見える「猪養の岡」や、『延喜式』諸陵寮にある「吉隠陵」(皇太后紀氏、すなわち光仁天皇母の紀橡姫の母の陵)について、その位置を知ろうと駕籠かきや里人に尋ねるが、誰も知らず落胆している。そして『万葉集』が、吉隠に「ふなばり」という訓を付けていることについて疑問を呈し、里人も「よなばり」と言っていると指摘している。この「ふなばり」との訓は、契沖『万葉代匠記』初稿本に見えるものであった。[(2)]

また「さて川（＝吉野川）べにそひつゝ。すこし西に行て。丹治といふ所より。よし野の山口にかゝる。やゝ深く入もてゆきて。杉むらの中に。四手掛の明神と申すがおはするは。吉野山口神社(神名帳〈傍注〉）などにはあらぬにや。されどさいふばかりの社とも見えず。此森より下にも上にも。此わたりなべて桜のいとおほかる中を。のぼりのぼりて。のぼりはてたる所。六田のかたよりのぼる道とのゆきあひにて。茶屋あり。しばしやすむ。此屋は。過こし坂路より。いと高く見やられし所也。こゝより見わたすところを。一目千本とかいひて。大かたよし野のうちにも。櫻のおほかるかぎりとぞいふなる。（中略）うしとらの方に。御舟山といふ山見えたり。（萬葉に瀧のうへの御船の山）されどその山は。瀧のうへのとよみたれば。此ちかき所などにあるべくも覺えず。これも例のなき名なるべし。こゝはよし野の里にいる口にて。これよりは。町屋たちつゞけり」(344～345頁）に見える「瀧のうへの御船の山」という歌は、巻3-242の「瀧の上の　三船の山に　居る雲の　常にあらむと　我が思はなくに」である。ここでも万葉歌からすれば、三船の山は瀧の上で、雲がかかるほどの高さを有するものであって、現実の御船山とは異なった情景であるから、両者は別物であると、実地に見た上で断じているのである。

このように宣長は、単に万葉歌に見える地名と一致するからといって、目前の地名をそれにあてることはせず、万葉歌の内容に踏み込んで、比定の是非を判断しているのである。現在使用されている地名が、古代のものと同じであるからと言って、古代以来のものであると必ずしも即断はできない。これは現代において古代史を研究する者にとっても、注意しなければならないことである。

ところでもう1つ、藤原宮跡について紹介しよう。宣長は3月11日に岡寺、酒船石を見た後、飛鳥の里に入った。そして飛鳥寺、飛鳥の神社(飛鳥坐神社)から近くの大原寺に詣でた。そこで「又此寺は。持統天皇の藤原宮の跡なるよし」を「こゝの法師はかたりけり」(363頁）とあるから、その少し前に大原寺を「藤原寺（トウゲンジ）ともいふよし」とあるのも、「こゝの法師」から聞いたのであろう。そして「藤原といふも。すなはちこの大原の事也といふは。さも有ぬべし」と述べる。大原は『万葉集』巻2-103「(天武）天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首」の「我が里に　大雪降れり　大原の　古りにし里に　降らまくは後」に見えるところであり、また藤原鎌足の生まれた所との説もある。すなわち『藤氏家伝』鎌足伝によると鎌足は藤原第で生まれたというが、『多武峯縁起』は「大和国高市郡大原藤原第」とする。これによれば、藤原は大原の中の地名であり、大原は現在の明日香村小原にあたる。先の引用文中の「藤原といふ」のは、この藤原のことである。

しかし宣長は、法師の大原寺を藤原宮跡とする話に疑問を呈する。すなわち「持統天皇の藤原の宮と申すは。こゝにあらず。そは香山のあたりなりし事。萬葉の歌どもにてしられたり」(363頁）と批判する。そしてそれに続けて、「かねては。この大原といふ里。かぐ山のちかき所に有て。藤原宮も。

そこならんとこそ思ひしか。今来て見れば。かぐ山とははるかにへだゝりて。思ひしにたがへれば。いといとおぼつかなけれど。なほ藤原の里は。この大原の事にて。宮の藤原は。べち（＝別）にかの香山のあたりにぞありけんかし」と考証を加える。すなわちこの辺りは大原とも藤原とも言うので、ここに藤原宮が営まれたとの説があったのである。それは長歌「藤原宮の御井の歌」（『万葉集』巻1-52）の「やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば(後略)」に歌われた藤井が原を、藤原（＝大原）にあてることによる。この長歌は、藤井が原に造られた大御門（藤原宮）の近くの埴安（池）の堤から眺めると、東に香具山、西に畝傍山、北に耳成の青菅山、南に吉野山が見えるという情景を詠んだものである。宣長も藤原の里が長歌の「藤井が原」にあたると考えていたのだが、そこが後述するように藤原宮が営まれた付近にあった香具山とは遠く離れていることから、不審を抱き、藤原の里と藤原宮は別の所と判断するに至ったのである。これも実際に現地を見ての考証結果である。

宣長はこの日、さらに嶋の庄（明日香村島庄）に行った後にあべの里（現・桜井市阿部）まで北上し、そこから西へ向かい吉備村（同市吉備）・池尻村・かしはで村（橿原市膳部町）と来て、香具山に登っている。「古より名はいみしう高く聞えて。天の下にしらぬものなく。まして古をしのぶともがらは。書見るたびにも。思ひおこせつゝ。年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ。此度はいかでとくのぼりてみんと。心もとなかりつるを。いとうれしくて」（365頁）と、歌を詠んでいる。その後、香具山の西の別所村（同市別所町）に来ると、そこには「大宮と申す御社」があった。それは「高市社はこれ也ときゝおきしかば。たづねてまうづ。香山のすこし西也。今はこの北なる高殿村といふ所の神也とぞ」（367頁）という。これは鴨公の森と称し、事代主命を祀った社であろう。並河誠所他『大和志』（享保21年(1736)）では、それを延喜式内社の高市御県坐鴨事代主神社にあてている。そしてそれに続けて「この御社の西の方にも池あり。持統天皇の藤原宮と申せしは。このわたりにぞ有けん。今高殿などいふ里の名も。さるよしにやあらん」（367頁）と、藤原宮の位置について述べている。ここでは万葉歌を引いていないが、言うまでもなく先の「藤原宮の御井の歌」の後段に大和三山を詠み込んでいるところから、三山に囲まれた所に藤原宮があったことは、よく知られていたことである。むしろそれに触れないことは、あまりにも有名であったこと、すなわち「さまで物せんも。旅路のにきには。くだくだしければ。例のもだしぬ」（367頁）という態度をとったのであろう。

とにかくここで宣長は、藤原宮跡を高殿村（現・橿原市高殿町）付近にあてているのである。それは万葉歌の内容と「高殿」という現地名とから導き出された結論であった。現在では発掘調査の結果、高殿町の西北端にある土壇（かつて大宮土壇と呼ばれた）が、藤原宮の大極殿跡であることが判明し、宣長の考えが正しかったことが証明されているところである。[3] 大宮のあった鴨公の森は、その大宮土壇にあったものである。

なおこの藤原宮跡＝高殿説は、もともと宣長の国学の師であった賀茂真淵が明和５年（1768）成立の『萬葉考』で唱えた説であった。すなわち「藤原宮之役民作歌」（『万葉集』巻１-50）に関し、「宮の所は十市郡にて、香山・耳成・畝火の三山の真中也、今も大宮殿と云て、いさゝかの所を畑にすき残して松立てある是也」（『萬葉考』巻１）[4] と注釈を加えているのである。この「大宮殿」は大宮土壇と呼ばれた高まりである。

宣長はこの大宮土壇説を、『菅笠日記』より後に著した『古事記伝』でも唱えている。それは応神記に見える藤原之琴節郎女に加えた考証の箇所で、「藤原は地名なり、大和国高市郡大原村是なりと云り、さもあるべし、（中略）持統天皇の京の藤原宮は異地なり、思混ふべからず、（中略）其地は、香具山の西方耳成山の南方なり、（中略）然るに彼大原と此宮とを一に心得たるは地理をも考へざる

妄説なり、大原は香具山よりは南方にあたりて飛鳥に近き処なれば、かの萬葉の長歌の趣に合はず」(巻34)[5] と述べている。先に見たように、宣長は大原も藤原宮の地も訪れており、大原＝藤原宮説への「地理をも考へざる妄説」との批判は、『菅笠日記』時の現地訪問を踏まえたものであったのである。

宣長はさらに高殿の所で、「さて埴安の池も。かならずこのわたりと聞えたるを。今たえだえに所々つゞきて。ひきゝ岡のいくつもあるは。かの堤のくづれのこりたるなどにはあらじや」(367頁) と述べているが、これも「藤原宮の御井の歌」に埴安池が詠み込まれていることを踏まえてのことである。こうして宣長は、吉野や飛鳥などを巡りながら、万葉歌に見える地名と現地とを引き比べ、その故地を探っていったのである。この現地実見に基づく実証的態度は、その後の歴史研究に大きな影響を与えたものであると言えよう。

(2) 北浦定政

次に幕末の北浦定政 (1817－71) を取り上げる。北浦定政は文化14年 (1817) に大和国添上郡古市村 (現・奈良市古市町) に生まれ、伊勢・藤堂藩が山城・大和に領有していた土地を支配するために古市に置いていた城和奉行所に仕えながら、大和各地を歩き、条里・山陵・都城などを調査した人物である。とりわけ嘉永５年 (1852) 年作成の「平城宮大内裏跡坪割之図」は平城京研究の嚆矢として著名なものである。すなわち京の条坊制に関わる文献史料・絵図資料や地名と、自ら踏査・測量した条坊道路の痕跡などを総合して作成した平城京条坊復原図であり、以後の京研究の基礎を築いた貴重な業績である。

定政には古代大和に置かれた宮都や地名の考証に関わる著も多数ある。北浦定政の著した多数の資料は、北浦家から奈良文化財研究所に寄贈され、2002年には重要文化財に指定されたところであり、その目録は同研究所から『奈良文化財研究所所蔵北浦定政関係資料』(1997年) として刊行されている。ここではその資料のなかから、地名考証に関わって『万葉集』を引いているものを紹介する。[6]

まず『大和国古都略記図草』(前記『関係資料』に載せる目録篇では、Ⅰ「著述稿本絵図類目録」、二「古都略記」の１にあたる) は「帝都考」と「大和国宮城部」からなり、それぞれに図を付けて帝都の位置を考察したものであるが、そのうち「帝都考」の中で、持統天皇・文武天皇の都について、次のように記す。

「藤原宮高市郡高殿其跡なるよし忠友／が考へられたり。万葉集第一巻の藤原の／宮の御井の歌に地理よく叶へり。今高／殿村に字大宮字京ノ口字若宮等の／地／名残れり。又「字」(抹消) 清水とよぶ井阿り。是正しく／御井なるべし」(句点・濁点を補った。／は改行箇所)

『万葉集』巻１の「藤原の宮の御井の歌」とは先に本居宣長のところで触れた52番の長歌である。高殿村に藤原宮の跡があるという説を、定政は穂井田忠友[7]が考えたこととするが、実はそれより早く賀茂真淵や本居宣長らが唱えたことは先に述べた通りである。定政は現地に立ち、『万葉集』に歌われた情景との一致、さらには大宮・京ノ口・若宮などの帝都関係の地名の残存、清水と呼ばれる井戸の存在などから、まさにそこが藤原宮の跡としてふさわしいと考えたのである。短い文章であるが、現地調査の結果を踏まえた考証であり、定政らしさが現れている。

『大和国古都略記図草』の中で『万葉集』を引いているのは、ここのみである。またこの書のうちの「帝都考」部を浄書した『大和国古都略記図』(同前Ⅰ二２) もあり、同じ文章が記される。

次に地名考証に関わる著作では、まず『大和国地名抜書』(同前Ⅰ二４) は、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『延喜式』などの中から磐余・磯城・三輪・海柘榴市に関する記事を抜き出したものである。

例えば磐余邑については、『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年９月戊辰条、雄略天皇10年10月条などとともに、『万葉集』巻３-282の「角障経石村毛不過泊瀬山何時毛将超夜者深去通都（つぬさはふいはれもすぎずはつせやまいつかもこえむよはふけにつつ）」（振り仮名は濁点を補った）を引いている。そしてその後「万三　角障経石村之道乎（長歌）、万十三　角障経石村乎見乍（長歌）石村山（反歌）」と記す。これらは『万葉集』巻３-423、巻13-3324・3325の歌である。その他、磯城邑について巻10-2143の「敷野」、同天神について巻8-1560・1561の「跡見田庄」を引く。このようにこの書は題名通り、『万葉集』などから関係地名が出てくる個所を抜き出したものであり、地名考証を行うための資料整理と位置づけることができよう。

同じような性格をもつものが、『大和名所抜書』（同前Ｉ三「神社名所記」の２）の中の「万葉集大和名所抜書」である。これは『万葉集』の巻ごとに、詠み込まれた大和の名所を歌の順に従って、次のように摘記した書である。

万葉第一巻

七 香具山　同 内乃大野　十一 三山（高山　雲根火／耳梨）／十三 三輪山　奈良能山（後略）

歌番号で言えば、香具山は２、内乃大野は４、三山は13、三輪山と奈良能山は17となるから、それぞれの地名の冒頭にある数字は歌番号ではない。おそらくは定政が所持していた『万葉集』の頁を表すものであろう。これも資料整理の書であることは明らかである。

現在奈良文化財研究所が所蔵している北浦定政関係資料の中で、『万葉集』に関わる部分は上に紹介したものにとどまる。そこで考証を行っているのは、最初に示した『大和国古都略記図草』と『大和国古都略記図』にとどまるが、定政が大和の地名などの研究を行うに際して、『万葉集』特にそこに見られる地名に深い関心を抱いていたことがよくわかる。大和各地を踏査した定政の実証的態度が、これらの著作から浮かび上がってくるのである。

2　戦前の研究

明治以降、近代的古代史研究が進められる中で、『万葉集』は『古事記』『日本書紀』などと並んできわめて重要な位置づけを与えられた。とりわけそこに見える地名は、古代史の舞台を復元する上で有用なものである。したがって研究の過程において『万葉集』を史料として用いない古代史研究者はいないと言っても過言ではない。そのため取り上げるべき人も多くなるが、ここでは物故者に限り、数人を取り上げるにとどめる。

さて昭和になってまもなく、1930年代から40年代にかけて、『万葉集』に関わる地誌書が相次いで刊行された。まず古代史学者ではないが、奈良女子高等師範学校教授を務めた豊田八十代が、1932年『萬葉地理考』(大岡山書店。1983年有明書房から復刻)を著した。豊田は『国語教授法』（1906年）『読方教授の研究』（1912年）など国語教授関係著書を多く書いているが、また『萬葉集新釈』(1916年)『萬葉植物考』(1031年)『萬葉集通釈　上・下』（1938・39年）などの『万葉集』関係の著作も多い。『萬葉地理考』もその１冊だが、これは地名を五十音順に並べ、それが現在のどこにあたるかという地名比定と、関係万葉歌を並べて記した書である。ただし『万葉集』に見られる地名を総覧したものであるから、それは大和に限らず全国にわたっている。

例えば「うぢまやま」（宇治間山）の項は次のようである。

大和国吉野郡池田千俣（現・吉野町千股）に在り。飛鳥地方より上市へ越ゆる道に当れり。

七五　宇治間山朝風寒し旅にして衣かすべき妹もあらなくに

いずれの項もこのような簡略な記事であるが、始めにあげられた参考書目からすると、地名比定に

ついては並河誠所他『大和志』、吉田東伍『大日本地名辞書』(1900〜07年)、奈良県高市郡役所『奈良県高市郡志料』(1915年)などを参照したものであろう。なおこの書には、付録として萬葉地図11葉が付いている。それは奈良・飛鳥・吉野・恭仁・住吉・和歌山などであるが、多くは5万分の1の縮尺である。これらの地図は「はしがき」によると、「その頃(大正五年)、佐々木信綱博士の依頼があつたので、萬葉地図を作製し、心の花誌上に掲げたのであるが、今から考へると、不完全極まるもので」あつたので、それを大修正するためには、まず地名の研究をしなければならないと『萬葉地理考』の編纂に着手したのであり[8]、かつてのものの改訂版であった。

豊田の『萬葉地理考』刊行の翌1933年には、奈良県に生まれた郷土史・古代史家の大井重二郎(1908−85)による『萬葉集大和歌枕考』(スズカケ書店)が刊行された。大井には『万葉集』に関わる著書や論文が多数あるが、これもその1つである。そこでは19地方145カ所の大和国内の歌枕をあげ、各歌枕の項で、その位置や名前の由来、文献史料での知見などとともに、関係する万葉歌を列挙している。『万葉集』から全部で580余首を選び、それぞれの歌枕の所に掲出しているところである。

また1942年に刊行した『萬葉大和』(立命館出版部)は『萬葉集大和歌枕考』の続編、改訂版とも言うべきものである。その辺の事情は「序」に述べられている。すなわち大井は『萬葉集大和歌枕考』以後も『萬葉集山城歌枕考』(立命館出版部　1936年)『萬葉集摂河泉歌枕考』(立命館出版部　1939年)を著し、五畿内の萬葉歌枕の研究は一応完了したが、究極の目標は歌枕の究明を通じて上代文化の淵源の地をより深く探求し、文化史への新しい一部門を構成したいということであった。そのためには歌枕の研究結果から省察して、さらに種々の角度から人文的研究を行う必要があると感じ、五畿内における部民など、上代経済機構を研究してきた。そこで「萬葉歌枕の究明にも此の観点より再検討すべき必要を認めてゐたが、偶々立命館出版部より旧著大和歌枕考の全面的改訂を行ふべく慫慂を受け、此の機に従来の遺漏を拾摭し訂正を施すことにした」(6頁)のが、『萬葉大和』であった。そこでは地勢の区分と上代聚落の分布状態を照合し、大和を奈良附近・石上附近・平群附近などの14地方に大別し、その上で歌枕を127カ所に列叙し、関係ある万葉歌560余首を配した。

ここで『萬葉集大和歌枕考』と大きく異なる点を1つ紹介する。それは藤原京の項で「乞食者詠二首」の一首「右歌一首為蟹述痛作之也」(左注)(巻16-3886)中の「押照るや　難波の小江に　廬作り　隠りて居る　葦蟹を　王召すと　何せむに　吾を召すらめや　明けく　吾知ることを　歌人と　吾を召すらめや　笛吹と　吾召すらめや　琴弾と　吾を召すらめや　彼も此も　命受けむと　今日今日と　飛鳥に至り(後略)」の笛吹・琴弾を地名ととらえたことである。これまでそれらは「語部の演技たる笛吹琴弾の業を意味するものとされ来つたが」(189頁)、この長歌は「藤原京に人民の大御饌を奉仕する状を歌つたもの」(187頁)であり、藤原京に「難波の蟹を貢上し来つたものである」(188頁)。それを踏まえると、「必ずや地名に関連して其の俳技を表現せるものと考へられるのであつて」(189頁)、笛吹・琴弾を地名とみると、「難波より藤原に至る道程に當時の官道としての古道が浮び上つて来るのである」(189頁)とする。そして「難波を発して當時の官道たる丹比古市の線より逢坂を越えて大和に入り、葛城連嶺の東麓に沿うて一路南下すれば忍海に笛吹神社があり、葛城秋津より飛鳥に出る途次の富田に琴弾坂がある」(同)と指摘し、「此の琴引(ママ)東方丘陵を東に越えて、南方より飛鳥に入るべき要路檜隈に達する」(189〜190頁)と述べているのである。ここからは万葉歌を天皇に対する地方人民の奉仕関係と結びつけて解釈するような研究が出てきたことが窺え、『万葉集』を古代史研究の素材として活用する方法が一歩深まったことが理解できよう。

大井重二郎は他にも『万葉集』に関わる研究が多くある。大和国史会の機関誌『大和志』に掲載されたものを見ても、「萬葉集に現れたる初瀬地方の文化」(4−1　1937年)、「大和三山の性説につい

て」（4－6　1937年）、「萬葉集に現れたる諸種の占」（6－9　1939年）などの論文をあげることができる。

次に奈良女子高等師範学校教授を務めた佐藤小吉（1872－1961）を取り上げる。佐藤は山形県に生まれ、東京帝国大学を卒業して後、1911年に奈良女子高等師範学校に招かれ日本史を教えた。その一方、奈良県史蹟勝地調査会委員として活躍するとともに、雑誌『大和志』には「春日若宮祭について」（1－3　1934年）をはじめとして多くの論文を執筆した。[9]

佐藤は1944年に、飛鳥の地誌である『飛鳥誌』（天理時報社）を著した。それは第1篇「総説」、第2篇「各説」からなり、第1篇では飛鳥の歴史を上代・中世・近世の3章で概観し、第2篇では皇宮址・陵墓・上代地理・神社・寺院・荘園・城塁・先史遺蹟・古墳・歴史時代出土遺物を10章に分けて論述している。そして、後者の皇宮址・陵墓・上代地理などの章の各項目では、それらに関わる『日本書紀』や『延喜式』『新撰姓氏録』などの文献史料や、所在に関する先行諸説などを引いて、詳しく論述している。そしてその中でも当然ながら『万葉集』を多用しているところである。

例をあげてみると、天武天皇の飛鳥浄御原宮の項（102頁）では、『日本書紀』天武天皇元年是歳条・2年2月癸未条をあげ、それが岡本宮の南にあったことを指摘し、さらに『日本書紀』に見える同宮の諸施設を紹介する。またそれには京が付属していたと考え、京師・左右京職などの語が見えることから、それが左右両京に分かれていた可能性を指摘した上で、その所在に関する諸説を紹介している。すなわち並河誠所他『大和志』・吉田東伍『大日本地名辞書』・奈良県編『大和志料』（1914～15年）などは、岡の東南方にあたる高市村大字上居（ジョウゴ　現・明日香村上居）を浄御の意と解して、そこに浄御原宮があったと考えた。それに対し文部省図書審査官・京都帝国大学教授などを務めた古代史家の喜田貞吉（1871－1939）は、上居では狭すぎると批判し、天武崩御の際に殯宮を南庭に設け、京城の老若男女が集まり橋西に慟哭したとあること（『日本書紀』朱鳥元年9月戊申条・持統天皇元年8月丁酉条）から、宮は飛鳥川の東にあったとした。その上で、飛鳥小学校の西の飛鳥川に架かる橋の付近で、加工した跡の残る橋杭らしき石が発掘されたこと、そこは東面に開け、かつ学校の東方の小字石神の田から石製の遺物が出土したこと、ミカドという小字名があることなどから、そここそ飛鳥浄御原宮の跡であると断じたのである。さらには柿本人麿が高市皇子の城上の殯宮で詠んだ長歌（『万葉集』巻2-199）の「掛けまくもゆゝしきかも言はまくもあやに畏き飛鳥の真神の原に久堅の天津御門を畏くも定め給ひて神さぶと岩かくります八隅しゝ我が大君云々」からは、同宮が真神原にあった法興寺（＝飛鳥寺）に近いことがわかるが、[10]先の石神・ミカドはまさに安居院に接近した地であることを指摘している。さらに喜田は雷岡を飛鳥岡とし、その東方に飛鳥岡本宮を求め、その岡本の宮の南に浄御原宮はあったと考えたのである。[11]現在の石神遺跡の辺りにあたろう。

佐藤小吉はさらにその後に、京都大学工学部教授・西日本工業大学工学部教授などを歴任した建築史家福山敏男（1905－95）の説を引いている。すなわち「やすみしゝ我大王の夕されは見し賜ふらし明けくれは問ひ賜ふらし神岳の山の黄葉を今日もかも問ひ給はまし明日もかも見し賜はましその山を振放け見つゝ」(巻2-159)という歌に出てくる神岳を雷岡にあて、その近傍に浄御原宮はあったであろうからと、雷岡の西北方のあたりにあったと見うるかもしれぬとするものである。[12]このようにここでは佐藤は、特に自説を述べるのではなく、これまでの飛鳥浄御原宮の所在に関する諸説を紹介するという立場に終始している。

もう少し紹介すると、「藤原京」の項目では、『日本書紀』の藤原京造営関係記事をあげた後に、先に北浦定政のところでも紹介した『万葉集』「藤原宮の御井の歌」(巻1-52)を引き、「大和三山たる畝火、耳成、天香山の中間に位置した事が推察され」（108頁）るとする。また「金橋村雲梯」（現・橿

原市雲梯町）では、「彦坐命の後裔川俣公の居地である」(182頁)と指摘した上で、「雲梯は萬葉集巻七に『真鳥住む卯名手の神社の菅の根を衣にかき著け著（着の誤字＝筆者注）せむ子もがな』とある卯名手即ち溝の意で田間の水路を称し川俣同義であつて、川俣氏が勧農の手段として水利を図り利用厚生に資したるものかと考へられる」(183頁）と考証している。

『飛鳥誌』はこのように、まさに飛鳥周辺に関わることを広く扱った地誌の書であり、古代地名の比定や、それに関わる事項を述べたものである。

これまで紹介したように戦前、昭和初期における奈良県関係者の研究には、地名の研究や地誌書の作成が多かったが、そうした動向は県関係者に限られることではなかった。1930～40年代にはこれらの他、大阪府立図書館に勤めていた奥野健治の『萬葉大和志考』(大阪府立図書館同人会　1934年。奥野健治著作刊行会編『萬葉地理研究論集第1巻』秀英書房　1985年に収録された)、北島葭江『萬葉集大和地誌』(関西急行鉄道　1941年)[13]、北京師範大学教授の阪口保による『萬葉集大和地理辞典』(創元社　1944年)などが相次いで出版されている。これらは紀元2600年（1940）にあたって「建国の聖地」大和への回帰のうねりが高まったという社会的風潮[14]に呼応する動きであったのであろう。

3　戦後の研究

(1)　古代史研究

戦後になると皇国史観から解放され、古代史研究はいっそう盛んになる。そのなかで、『万葉集』の活用も多彩なものが生まれてきた。

奈良県白銀村（現・五條市西吉野町）に生まれ、県立五条高等女学校・櫟本実業女学校・添上農業学校教諭、近畿日本鉄道株式会社史料編纂室室員、梅光女学院大学教授などを務めた古代史家の田村吉永（1893－1977）には、宮都・都城制・条里制などに関する研究が多い。いくつか紹介してみよう。

「飛鳥岡本宮、後飛鳥岡本宮并飛鳥浄御原宮の所在」(『史学雑誌』66－7　1957年）は、題名どおりに3つの宮跡の位置を考察したものである。田村は飛鳥岡本宮と後飛鳥岡本宮は同地で、飛鳥浄御原宮は後飛鳥岡本宮の南に造営されたものであるから、どれか1つがわかれば他は自ずから判明するとして、岡本宮の考察を始める。そして『日本書紀』皇極天皇2年9月壬午条によると、岡本宮に居した舒明天皇を高市天皇とも呼んだこと、『万葉集』巻1-2では舒明天皇のことを「高市岡本宮御宇天皇」ということから、岡本は高市と同地とみた。また『日本書紀』天武天皇2年12月戊戌条に造営官司の見える高市大寺（後に大官大寺と改名される）も、高市＝岡本にあったと考えた。そこで次にこれらの所在地探求にあたって重視したのが、神護景雲元年12月1日太政官符（『類聚三代格』）によって大安寺に勅施入された、大和国の2町の田の所在である。すなわち1町は「路東十一橋本田」であり、もう1町は「路東十二岡本田」であるが、それらは「高市郡高市里専古寺地西辺」にあった。田村はそれを「大安寺」という小字の地にあたる路東28条4里の11・12坪にあてるが（現・明日香村小山)、そこはまた史跡大官大寺跡の東隣にあたる。大安寺は大官大寺の別名である。ところが11・12坪の小字大安寺からも白鳳瓦が出土しており、寺院があったとみられるが、12坪中の一部に残る「金ヤケ」という小字がその寺の伽藍地の一部であったと考えられる。これこそが天武天皇が造立した高市大寺であり、それが大宝年間に藤原京左京の大寺として移転造立されたのが[15]、西隣の史跡大官大寺跡の池であった。かくて12坪の「金ヤケ」の地が岡本の地であり、これこそが岡本宮の名残であると断じたのである。そしてその南に造ったという飛鳥浄御原宮については、『万葉集』巻19の「皇は神にしませば赤駒の腹はふ田居を京師となしつ」(4260）と「大王は神にしませば水鳥のすたく水沼を皇都となしつ」(4261）から、田居・水沼の地であったことが知られるのであり、その地勢が浄御原

の名の起源であった。こうして田村は浄御原宮は、ほぼ大官大寺跡の南方にかなりの広範囲にわたって、4町四方の規模で営まれたと推定したのである。

なお先述のように喜田貞吉は雷岡の東方に岡本を求め、浄御原宮をその南方に比定し、さらにやはり先に引いた『万葉集』巻2-199「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首」により、それが真神原にあったことがわかるとして、飛鳥寺のある真神原に近いと考えた。それに対して田村説では、浄御原宮はそこよりも北の地にあったが、それが田居・水沼の広がる「浄御原」に造られたことから、そこがまた真神原の意味を持ったものと解されるとしたのである。

このように田村吉永は浄御原宮などの所在を求めるにあたって、諸文献史料・考古資料・地理資料などとともに『万葉集』に歌われた情景や、そこでの天皇の呼称などを重視したのであった。

こうした田村の宮跡考証は、その後『飛鳥京藤原京考証』(綜芸舎　1965年)でまとめられ、ここで見た浄御原宮に関する考証の概要も、そこに収められている。同書中からもう1つ香久山宮の項を見てみよう。再び「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首」(『万葉集』巻2-199)を見ると、その中に「しかれども　わが大王の　万代と　おもほしめして　作らしし　香来山の宮　万代に　過ぎむともへや」と詠まれていることから、「持統天皇の太政大臣であった高市皇子の常の宮であった」(39頁)香久山宮の存在を指摘する。そして「現在高殿聚落内(現橿原市高殿町)にあって、北を北京殿、南を南京殿と小字する二町がある。地は内裏朝堂に三百米、香久山南麓に百米のところで、これを私は香久山宮跡と考える」(40頁)と述べているところである。ここでは『万葉集』は宮号復元の史料として用いられているのである。

戦前の研究で紹介した大井重二郎は、戦後も多くの著作を発表している。その1つに「平城京と万葉集」(大井『平城古誌』初音書房　1974年)がある。この論文は「広汎に平城京関係の万葉歌について考察を進め」(2頁)ようとしたものである。これはかつて「万葉集もいたずらに天平文化の顕彰化に利用された嫌いさえあった」という反省を踏まえ、近年とみに盛行している『万葉集』研究も、平城京関係の万葉歌については、「むしろ郷愁を覚えさせるに過ぎないような叙述も見られる」と不満を示し、「古記録を駆使して万葉歌の背景を突いた史家の著作に却って学ぶべきものが多い」(2頁)と評価したうえでのことであった。万葉歌を単に地名や遺跡の位置の復元に利用しようとする研究から、一歩踏み出し、そこに歴史を読もうとするものである。

大井は62頁にも及ぶこの長編の論文の中で、多くの万葉歌を引用し、平城京のさまざまな面－遷都・造営・都市制度・住居・生活などを描き出している。たとえば「造都と資材・役民」の節では、「乞食者の詠二首」のうちの「鹿のために痛を述べて作る」歌(巻16-3885)を引く。そこでは、鹿は死んでもその角や耳、皮、肉などが天皇の役に立つことを詠んでいるが、それを鹿の天皇への奉仕を説いたことほぎ歌、皇室への讃仰の歌と捉える多くの研究者の解釈を批判し、役民の苦痛を述べた歌と解するべきであるとしたうえで、「宮材引く泉の杣に立つ民のやすむ時なく恋ひわたるかも」(巻11-2645)について、これを平城京造営時の歌とし、「宮殿造営の材が山城方面から多量に運漕されたこと、これに従事する役民の瞬時も休息し得ない労苦がこの短い序詞の中に端的に表現されている。正史に記録されなかった造宮の苦痛は万葉集巻一と十一に果然表現され、或は隠微に、或は比喩として、時には顕然と詠われているのである」(13頁)と評価している。万葉歌からこうした庶民の苦しみをとらえ、そこに歴史の真実を見出そうとする態度は、戦前の研究には見られなかったものと言うことができよう。こうして『万葉集』はいっそう幅広く、そして深く古代史研究の素材として活用されるようになったのである。

大井はこの論文の中で、実に100首を超える万葉歌を引用し、さらに『続日本紀』や『懐風藻』・

正倉院文書を駆使し、平城京の様相を活写していると評価できよう。

なお大井には、「万葉歌枕に関する疑問二三」(『萬葉』18　1956年)、「『藤原宮之役民作歌』をめぐって」(『園田学園女子大学論文集』4　1969年)、「東歌の新嘗の歌について」(『同』8　1973年)、「佐保の内の万葉歌人－文学のサロンとその政治的背景」(犬養孝博士古稀記念論集刊行委員会編『萬葉・その後』塙書房　1980年)など多数の『万葉集』関係の著作がある。

さて古代史研究の最後に、奈良市に育ち、奈良女子大学助教授・京都大学教授・橿原考古学研究所長などを歴任した岸俊男(1920－87)を取り上げる。岸はきわめて緻密で実証的な古代史研究者として知られるが、『万葉集』を歴史学的に捕らえ直す作業を精力的に進めた。

岸のその方面での業績のいくつかを紹介すると、まず万葉歌を政治史分析の史料として用いたものがある。たとえば和銅元年に元明天皇が詠んだ「ますらをの　鞆の音すなり　もののふの　大臣　楯立つらしも」(巻1-76)と、それに和えた姉の御名部皇女の「わご大君　ものな思ほし　皇神の　つぎて賜へる　われ無けなくに」(巻1-77)から、文武崩御・元明即位直後の緊迫した情勢を推測した「元明太上天皇の崩御」(『日本古代政治史研究』塙書房　1966年、初出は1965年)などである。

しかしこれは多くの古代史家が行うことであり、岸俊男の『万葉集』を用いた優れた研究の多くは、1970年以降の宮都関係の論考の中に見出すことができよう。

まずは第1に『万葉集』に見える地名を元にした研究があり、その1つが大和の古道の復元研究である。すなわち論文「古道の歴史」と「大和の古道」(いずれも『日本古代宮都の木簡』岩波書店　1988年、初出は1970年)では、「幣帛を　奈良より出でて　水蓼　穂積に至り　鳥網張る　坂手を過ぎ　石走る　神名火山に　朝宮に　仕へ奉りて　吉野へと　入り坐す見れば　古思ほゆ」(巻13-3230)からは、平城京・穂積・坂手・神名火山・吉野を通る中ツ道を復元する。また「天飛ぶや　軽の路より　玉襷　畝火を見つつ　麻裳よし　紀路に入り立ち　真土山　越ゆらむ君は(後略)」(巻4-543)から大和・紀伊を結ぶ紀路を、「そらみつ　倭の国　あをによし　奈良山越えて　山代の　管木の原　ちはやぶる　宇治の渡　滝つ屋の　阿後尼の原を(後略)」(巻13-3236)から、大和から奈良山を越えて山背に入り山科へと続く道を復元するなど、『万葉集』に詠み込まれた地名を『日本書紀』などの史料とともに多用し、それに道路痕跡や考古資料・現存地名などを合わせて、上ツ道・中ツ道・下ツ道・横大路など大和を中心に、さらに周辺に伸びる古道を研究したのである。さらに「万葉歌の歴史的背景」(『宮都と木簡』吉川弘文館　1977年、初出は1971年)では、中ツ道の南への延長が香具山を越えて、飛鳥寺西門と橘寺東大門の前を通って「ミハ山」に至ることに注目し、この「ミハ山」こそ先の万葉歌(巻13－3230)に歌われる飛鳥の神名火山であるととらえ、香具山とミハ山を結ぶ中ツ道の重要性を強調した。これらの研究は、『万葉集』に詠み込まれた地名を用いたものであり、古くから行われてきた研究の延長線上にありながら、それを大きく前進させたものと言えるであろう。すなわち現在の飛鳥・藤原京の復元的研究の基礎は、上述の道路復元によって築かれたものであった。

岸は第2に都城・宮都の実態研究においても『万葉集』を重視した。ミヤコという言葉自体を研究した「記紀・万葉集のミヤコ」(『日本古代宮都の研究』前掲、初出は1976年)では、『古事記』『日本書紀』『万葉集』に見えるミヤコの用字(京・京師・都・王都など)を分析し、その諸書に見える用字の違いと変遷に注目し、それが日本における都城制の発展と関係することを述べている。岸はまた藤原京の建設が、持統天皇の一代前の天武天皇時代から始まっていたことを明らかにしたが、そのことをもとに、よく知られる壬申の乱後の歌「皇は神にしませば赤駒のはらばふ田為を京師となしつ」(巻19-4260)、「皇は神にしませば水鳥の多集く水沼を京師となしつ」(巻19-4261)を検討した。そしてこれが浄御原宮の建設を詠んでいるとすれば、当時既に飛鳥の地は開発され、田為でも水沼でもな

かったので、この歌とは合わないとして、これは天武天皇による藤原京の造営に関わるものであるという斬新な見解を提示しているところである（「都城と律令国家」『日本古代宮都の研究』前掲、初出は1975年）。

さらに朱鳥元年（686）10月に大津皇子が謀反の罪で捕らえられ、翌日訳語田の舎で処刑されたが、皇子の辞世の歌と伝えられる「百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」（巻3-416）から、訳語田の舎こそ皇子の宮であり、それは磐余池に近い場所にあったと推断するなど、『万葉集』の歌を手がかりに天武天皇の皇子たちの宮の所在を考察した論考「皇子たちの宮」（『古代宮都の探求』塙書房　1984年、初出は1981年）もある。

このように岸俊男は万葉歌に出てくる地名や内容などを歴史史料として多用したが、それにとどまらず第3に、『万葉集』の構成自体を問題にした論考もある。それは「画期としての雄略朝」（『日本古代文物の研究』岩波書店　1988年、初出は1984年）であり、『万葉集』の巻1の第1首「籠もよみ籠持ち　掘串持ち（後略）」が雄略天皇の歌とされていることに注目したものである。そして『日本霊異記』でも上巻第1縁は雄略天皇に関わる説話であること、『新撰姓氏録』では氏の起源を雄略朝にかけるものが多いこと、さらに『日本書紀』で用いられている暦が、雄略天皇の巻から変化していることなどを総合し、そこから古代人が雄略朝が古代の画期的な時代であったと認識していたと述べ、彼らの有していた歴史像を明らかにしたのである。

岸の万葉歌を扱った論考は、その他にも「古代史と万葉のことば」（『宮都と木簡』前掲、初出は1968年）、「古代日本人の中国観－万葉歌を素材として－」（『日本古代文物の研究』前掲、初出は1983年）など、多数ある。いずれもきわめて重厚な考証を展開しており、『万葉集』の古代史研究の史料としての活用を、岸俊男は大きく進めたと言うことができよう。なお岸には『古代史から見た万葉歌』（学生社　1991年）もあるが、これは連続講演会の記録である。

(2)　考古学研究

最後に考古学研究者による万葉歌研究を見ることにする。現桜井市に生まれ國學院大學教授を長らく務めた考古学者樋口清之（1909－97）は、文献史料にも関心を寄せており、その中で『万葉集』にもふれている。その一端を「日本古典の信憑性」（『國學院大學日本文化研究所紀要』17　1965年）に見ると、大和盆地はかつて湖であったが、地盤の隆起につれて湖面が次第に低下し、最後は干上がって浅い擂鉢状の盆地になった。『日本書紀』神武天皇紀に出てくる鳥見・菟田・磐余などの大和の地名はいずれも、少なくとも2600年以前の湖岸かそれより高い標高70m以上の場所に位置しており、それは単なる偶然ではない。『万葉集』巻1-2の舒明天皇の歌「大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし国そ　蜻蛉島　大和の国は」の「海原」を、万葉学者はみな香具山の麓の埴安池とするが、そうではなく国原に対する海原であり、かつての盆地湖の名残として、今の郡山の東の方がいまだ湿潤の地であったものを詠んだものと主張している。「海原」の考古学的解釈と言うことができよう。

樋口にはその他、「万葉集の経済生活」（『國學院雑誌』70－11　1969年）、「万葉人の衣食住」（『万葉集講座2』有精堂　1973年）のような論文もあり、そこでは『万葉集』を古代人の生活復元の史料として用いているのである。

このうち前者は、『万葉集』は「わが原始社会末期が、古代社会に移行するころ、すなわち経済生活においては、その様式が大きく変転する時を背景とする作品を中心に成り立っている」（14頁）という評価の上に、万葉歌に歌われた商業と採取生産の様相を指摘して、当時の経済生活を復元しよう

とした論文である。

たとえば「市と商業」の章では、「商変り　領らすとの御法　あらばこそ　わが下衣　返し賜らめ」(巻16-3809) という、愛が薄れたために、愛人が寄物（かたみ）の物品を返してきたのを恨んで詠じた娘の歌からは、「商変（あきがわ）り」という売買後の変約の慣習の存在を指摘し、「西の市に　ただ独立でて　眼竝べず　買ひにし絹の　商じこりかも」(巻７-1264) に見える「商じこり」、すなわち買いそこないの背景に詐欺行為の存在を推測するなど、市における交易活動の諸相を浮かび上がらせている。また「採取生産」の章では、「垣こゆる　犬呼び越して　鳥猟する公　青山の　しげき山辺に　馬息め公」(巻７-1289) から、猟犬を使用した狩猟の存在を指摘し、「水江の浦島子を詠む一首」(巻９-1740) 中の「春の日の　霞める時に　住吉の　岸にいで居て　釣船の　とをらふ見れば　古の　事ぞ念ほゆる　水の江の　浦島の児が　堅魚釣り　鯛釣り矜り　七日まで　家にも来ずて　海界を　過ぎて榜ぎ行くに（後略）」については、「この通り七日間も家を離れて漁獲をつづけていると解釈すると、これは船上で漁獲物の保存処理が行われないと不可能な方法だということになる」(20頁) と述べ、船上で釣り上げた魚への保存処理を行い、数日間にわたって遠洋漁法を続ける漁民の活動を復元している。このように樋口は多くの万葉歌を、古代人の経済生活を復元するための資料として用いているのである。

なお樋口は大和国史会の機関誌『大和志』にも、「考古雑録五題」(２－８　1935年)、「先史時代大和の聚落」(３－８　1936年)、「新発見の縄紋式土器出土遺蹟」(３－11　1936年) などの考古学の論文を寄せており、奈良とのつながりを持ち続けていたのである。

次に奈良県に生まれ、奈良県立橿原考古学研究所指導研究員や奈良県立考古博物館次長などを務めた考古学者である伊達宗泰（1927―2003）には、発掘調査報告書の他に『日本古代文化圏の形成と伝播』(学生社　1991年)『大和・飛鳥考古学散歩』(学生社　1996年)『「おおやまと」の古墳集団』(学生社　1999年) など多数の著書があるが、『万葉集』に関係しては、「万葉集にみる水田」(森浩一編『万葉集の考古学』筑摩書房　1984年) という論考がある。これは「尼、頭句を作り、并大伴宿祢家持、尼に誂へらえて末句等を継ぎて和ふる歌一首」である「佐保河の水を塞き上げて植ゑし田を（尼の作）刈れる早飯はひとりなるべし（家持継ぐ）」(巻８-1635)との関連で、当時の水田の様相を考察したものである。

伊達はまず、これが詠まれた時期を、平城京が恭仁京への移転騒ぎで混乱していた８世紀前半の後葉とし、詠まれた地域は平城京左京を流れる佐保川流域であるが、発掘調査の結果からすれば京域内は既に宅地化されており、京内における水田は考えられないとして、佐保川が外京北辺を西流する現在の奈良市川上・法蓮町付近に推定した。そもそも万葉歌から窺うところ、大伴氏一族は佐保近辺に邸宅を構えていたのである。その上で「水を塞き上げて植ゑし田」ということから、川を塞き止めて田に引水する方法を導き出し、それが1976年に調査された大和郡山市の稗田遺跡とよく似た状況であると指摘する。すなわちそこでは、長径100ｍ余、短径50ｍ余の不整形の浅い窪地を利用した、６世紀後半から11世紀に及ぶ水田跡が検出されたが、また奈良時代の川跡で護岸用・水流調節用・取水用という３種類のしがらみが確認されたのである。ただし全国におけるこれまでの発掘事例からすると、４種類の取水法が復元できるが、「佐保河の水を塞き上げて」という表現からすると、「川より直接取水した情景を想定したほうが適切なように理解するし、塞き止めてではなく塞き上げての表現は、施設を構築して大々的に広範な水田に取水する状況よりも、川辺の水田に土砂で塞をつくって取水した方法のほうが情景に合致しているように考える」(318頁) と、結論づけている。また他の万葉歌からすると、佐保川は幅広い川原やせせらぎを彷彿とさせるが、一条通りより南の奈良女子大学との間は

低湿地で、先の情景にふさわしいとも述べている。

このように伊達宗泰は、万葉歌を考古学の成果とも結びつけて解釈した上で、当該歌は「当時の水田農耕状況を認識しての表現であり、佐保川周辺水田の風情も見聞しての作歌と考えると、当時の水田を考える一資料となるもの」(319頁) と結論づけたのである。これは先の樋口清之の方法と共通するものであり、万葉歌は産業・生活を復元する資料としても活用されていることがわかる。

おわりに

本稿では近世の本居宣長以来、主に奈良県にゆかりのある古代史・地理・考古学研究者たちによる『万葉集』研究の一端を見てきた。主に地名比定から始まった万葉歌の史料としての利用が、次第にその幅を広げ、さまざまな方面にまで及び、また深まっていったことが窺えよう。しかしはじめにも述べたように、ここで紹介した人たちはその一部にすぎず、決して体系的に網羅したものではない。触れるべくして見逃している人も多くいるであろうし、現在活躍されている奈良県関係の古代史研究者の中にも、直木孝次郎氏や和田萃氏のように『万葉集』を大いに活用されている人たちがおられることも確かである。したがって本当の意味での研究史をまとめようとすれば、不十分極まりないものであり、今後の作業のための整理ノート、第一歩であるということを再度確認して擱筆したい。

注

(1) 『菅笠日記』は『本居宣長全集　第18巻』(筑摩書房　1973年) による。ただし原文割書は括弧内に入れた。また一部表記を改めたところがある。なお、本稿で用いる万葉歌の表記は、基本的に各研究者の引用に従った。

(2) 橋本雅之「『菅笠日記』の旅とその周辺」『第2回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム万葉の旅ここに始まる』(2005年9月19日) 参照。

(3) 最初の発掘は、1934年に日本古文化研究所によって高殿地区で行われたものである (同『藤原宮阯伝説地高殿の調査』1・2　1936・41年)。

(4) 『賀茂真淵全集』第1巻67頁　続群書類従完成会　1977年。

(5) 『本居宣長全集』第12巻36頁　筑摩書房　1974年。

(6) 調査にあたっては奈良文化財研究所歴史研究室吉川聡氏の協力を得た。記して謝意を表する。

(7) 穂井田忠友 (1791―1847) は、古典学者で正倉院文書の調査・整理を行ったことで知られる。

(8) 豊田八十代及び萬葉地図については、井ノ口史「豊田八十代の万葉地理研究」『第2回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム　万葉の旅ここに始まる』(2005年9月19日) 参照。

(9) 『大和百年の歩み　社会・人物編』(大和タイムス社　1972年) 参照。

(10) 法興寺が真神原に造られたことは、『日本書紀』崇峻天皇元年是歳条に見える。

(11) 喜田貞吉の説は同『帝都』(日本学術普及会　1915年　『喜田貞吉著作集5　都城の研究』(平凡社　1979年)に再録) に見える。

(12) 福山敏男の説は同「飛鳥京」『歴史教育』14－11(1940年) による。

(13) 初版は1940年の紀元2600年の記念出版であり、「筆者の思想を自由に述べることが出来なかつた」(はしがき) ので、その後改版し1956年に筑摩書房から刊行した。なお、北島葭江は大和史学会の参与を務めたことがある (『大和志』11－5　1944年)。

(14) 『奈良市史 通史四』第5章第3節2 (木村博一執筆) 1995年。

(15) 『続日本紀』大宝元年7月戊戌条に造大安寺官を寮に准じさせたことが見える。